OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学報　第266号　2021年2月22日

OCHADAI GAZETTE Spring, 2021

未来を拓く女性たちへ

CONTENTS

TOPICS

学長からのメッセージ ……1-4
- 未来を拓く女性たちへ
- 室伏きみ子学長を囲んで
（桜蔭会会報復刊 261号より転載）

学生のアクティビティ ……5-6

教員紹介…… 7
- 高橋　哲先生
（基幹研究院人間科学系　准教授）

卒業生紹介…… 8
- 唐津　絵理さん
（文教育学部 舞踊教育学科　卒業）

附属学校園からのお知らせ …… 9-10

お茶の水女子大学
Ochanomizu University

未来を拓く女性たちへ

メディアで大きく取り上げられていましたので、2020年4月に、東洋大学と同志社大学で、女性学長が就任されたことは、学生の皆さまも教職員の皆さまも、良くご存知のことでしょう。

東洋大学の新学長は、矢口悦子先生です。矢口先生は、神田道子先生（2000～2003年）に次ぐ東洋大学で2人目の女性学長ですが、嬉しいことに、お二人ともお茶の水女子大学の卒業生でいらっしゃいます。東洋大学は、1887年に「諸学の基礎は哲学にあり」との建学の精神の下、井上円了先生によって『私立哲学館』が創立されて以来133年の歴史を刻んで来ました。現在は13学部46学科、大学院15研究科を有し、2020年度には31,828名の学生を擁しています。

また、同志社大学の新学長の植木朝子（ともこ）先生も、お茶の水女子大学の卒業生でいらっしゃいますが、同志社大学145年の歴史の中で、初めての女性学長です。同志社大学は、本学の創立と同年の1875年に「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」という教育理念の下、新島譲氏によって『同志社英学校』として創立されました。現在、14学部38学科、大学院14研究科、専門職大学院2研究科を有し、2020年度の学生は27,372人を数えます。

いずれの大学も、日本屈指の総合大学で、特色ある教育と研究成果は世界的にも高い評価を受け、多くの優れた人材を輩出しています。

矢口先生と植木先生が、大きな共学の総合大学で、それぞれの大学の卒業生でいらっしゃる訳でもないのに、学長に選出されたことは、とても素晴らしいことだと思います。お二人が、抜きん出た教育・研究上の実績をお持ちのことは勿論ですが、大規模大学を牽引されるリーダーシップと、先進的な改革を推進されるお力に、大学構成員の方々からの大きな信頼と期待があるに違いありません。

新型コロナウイルスの世界的な蔓延で、辛いことばかりが多かった2020年でしたが、素晴らしい同窓生の学長が誕生したことは、本学が掲げている「グローバル女性リーダーの育成」の成果として、心から誇らしく思ったことでした。

2020年度の文部科学省による学校基本調査から、4年制大学の学長を調べてみますと、大学全体では学長及び総長773名中99名（12.8%）が女性ですが、その中で、国立大学では86名中3名（3.5%）、公立大学では93名中20名（21.5%）、そして私立大学では、594名中76名（12.8%）が女性です。

全体でも、女性学長・総長は極めて少ないのですが、特に国立大学における少なさは際立っていて、現在の国立大学の女性学長は、総合研究大学院大学の長谷川眞理子先生、東京外国語大学の林佳世子先生と私の僅か3名です。お二人とも、才気溢れるお考えと常に前向きの行動力をお持ちの方で、私は公私共に親しくして頂いています。

嬉しいことに、林先生も本学の卒業生です。僅か3名のうちの2名までがお茶の水の卒業生であることも、「グローバル女性リーダーの育成」とのミッションを実現している一例として、とても誇らしいことだと思っています。

東京外国語大学は、言語を通して外国に関する理解を深め、多文化共生に寄与することを目的として、1873 年に東京外国語学校として創立され、外国の言語と文化を研究・教授し、日本と世界諸地域を結ぶ人材を養成して来ました。その147年の歴史の中で、池端雪浦（せつほ）先生（2001～2007年）が初めての女性学長で、林先生は2人目の女性学長でいらっしゃいます。

なお、本学の同窓会である「桜蔭会」の会報編集委員会からのご提案で、矢口先生、植木先生、林先生と私の誌上対談が実現しました（桜蔭会会報 復刊261号）。とても素晴らしい企画ですので、是非、学生・教職員の皆さまに、お茶の水を巣立って、素晴らしい成果を挙げていらっしゃる先生方のお人柄などを知って頂きたいと、桜蔭会の皆さまにお願いしたところ、3人の先生方にもご許可頂くことが出来て、GAZETTEに転載させて頂けることになりました（本号3ページ～4ページ）。特に学生の皆さまにとって、先輩の方々のご活躍を知ることは、これからの生き方の一つの指針にもなると思っています。

なお、今回、ご紹介した学術界でご活躍の3名の先生方以外にも、本学の卒業生は、教育・研究分野のみならず、企業や行政、報道など、広い分野で活躍しています。それらの方々をお招きした講演会やシンポジウム、ワークショップなどが、度々学内で開催されていますので、大学のホームページなどに注意して頂き、時間が許せば聴講・参加して頂けますと嬉しく思います。

お茶の水女子大学では、学生の皆さまが、グローバルな視野をもって様々な分野における活動を牽引できる人材として育って頂くことを願い、長年にわたって、様々な事業に取り組んで来ましたが、2015年に『グローバル女性リーダー育成研究機構』を新設しました。そして、それまで本学が30年以上に亘って続けて来た「リーダーシップ養成」に関する教育・研究と「男女共同参画推進活動」を、社会からの要請に応じてさらに発展させるために、同機構内に『グローバルリーダーシップ研究所』を設置しました。本研究所では、社会の多様な場でリーダーとして活躍できる基盤を創るためのカリキュラム開発を進め、リーダーシップ育成を目的とする科目群を設置すると共に、学生の海外派遣プログラムの実施、シンポジウムや講演会の開催、キャリアアップを目指す社会人女性を対象とした生涯教育講座など、多様な事業を実施しています。

若い女性たちが、自分自身が目指す将来像と、実現したいと思う社会の姿を具体的に描けるように、社会（企業や自治体等）との連携による事業も展開しています。例えば、2019年に開講した「未来起点ゼミ」は、株式会社ブリヂストンと本学が協力して、未来の女性リーダーの創出を目指す取り組みです。これは、本学が附属学校園を持つ強みを活かして、高校から大学院までの生徒・学生が参加する新しいアクティブ・ラーニング形式のゼミで、未来を起点として、日本と世界の課題を提示するテーマを取り上げています。そして、生徒や学生間や、本学の教員やブリヂストン社から派遣される講師との間での対話による主体的で深い学修を通して、「未来の社会価値創造」を目指します。毎週の活発な議論を通して、未来を創るための思考力・表現力・実行力を身につけることが期待されています。

自治体との連携事業としては、福井県との間で2012年に女性リーダーの育成に関する相互協定を締結して、「未来きらりプログラム」と銘打ったプログラムを共同で実施しています。「製造業リーダーコース」「上司力養成コース」などの新規のリーダー育成コースのカリキュラム策定に協力するなど、福井県における女性の活躍に貢献して居り、2019年には、同県とU・Iターン就職支援協定を締結しました。

また、本研究所では、女性研究者の継続的な研究活動や研究中断後の円滑な復帰を支援する取り組みを進めると共に、多様性（ダイバーシティ）が尊重される社会の実現のために、男女を問わず多様な働き方が可能となる職場の環境づくりに取り組んでいます。

ところで、皆さまは、2020年12月25日に閣議決定された「第5次 男女共同参画基本計画」をご存知でしょうか？「男女共同参画基本計画」とは、男女が社会の対等な構成員として、様々な分野で均等に参画できる社会の実現を目指して、1999年に成立した「男女共同参画基本法」に基づいて、政府等が取り組むべき施策をまとめた計画のことです。10年間の「基本認識」と5年間を見通した「施策の基本的方向」及び「具体的な取り組み」を定めるもので、2000年12月に最初の基本計画が定められ、その後、5年毎に見直されることとされました。2020年は、5回目の計画の策定時期に当たっていて、これが今後5年間の政府の男女共同参画における施策と具体的な取り組みを決めることになります。

12月25日の男女共同参画会議で、第5次計画・答申が内閣総理大臣へと手交され、当日の閣議で決定されて、以下のような「目指すべき社会」の実現への取り組みが提示されました。① 男女が自らの意思に基づき、個性と能力を十分に発揮でき、公正で多様性に富んだ活力ある持続可能な社会、② 男女の人権が尊重され、尊厳を持って個人が生きることのできる社会、③ 仕事と生活の調和が図られ、男女が共に充実した職業生活やその他の社会生活・家庭生活を送ることができる社会、④ あらゆる分野に男女共同参画・女性活躍の視点を取り込み、SDGs で掲げられている包摂的かつ持続可能な世界の実現と軌を一にした取組を行うことで国際社会と協調する社会、そして、今後は「男性中心型労働慣行」から脱却し、女性が健康的に活躍できる社会の実現が目指されることになります。

お茶の水女子大学では、145年の歴史を通して、男女が共に幸せであることを目指して、幾多の先輩たちが努力を続けて来られました。そして、現在の私たちは、男女のみならず、性の多様性をも含めて、全ての多様な人々が共に尊重しあい、認め合って、健康で幸せな社会を築くために、第5次計画に示された「目指すべき社会」の実現に向けて、努力を続けたいと思います。

お茶の水から、多様性を包摂する社会を実現し、世界の平和に貢献できる、素敵な女性たちが育ち、羽ばたいて下さることを願っています。

室伏きみ子学長を囲んで（桜蔭会会報復刊261号より転載）

「お茶大から巣立ちグローバル女性リーダーとして大学を率いるかたたちと学長室で座談会を」という室伏学長の想いは、コロナ禍のなかで難しい状況にあります。ここにご紹介する4人の学長にご快諾いただけたことで、桜蔭会会報で誌面上での座談会が実現いたしました。室伏学長が大切にされている、人々の多様性を互いに包摂する（ダイバーシティ&インクルージョン）の理念は、4人の学長のなかで礎となることと思います。

東洋大学学長

矢口悦子さん（昭55教）

1980年に文教育学部教育学科を卒業した矢口悦子でございます。学生時代は青年の共同学習に関心をもち、社会教育分野で卒論を書きました。とくに、第2次大戦後に教師も黒板もなしで自主的な学習を展開していた地域青年の運動と、それを支え理論的な助言をしておられた吉田昇先生の「共同学習論」に多くを学びました。当時の言葉で「補導教官」（今のクラス担任でしょうか）が吉田先生でしたが、私たちが学部3年生の1月に急逝されました。ゼミは小川剛先生（2009年ご逝去）のところに所属、合宿で全国各地に出かけて、民泊や学生交流などじつに楽しい経験をさせていただきました。当時のゼミ仲間とは現在なお年数回の学習会を続けています。学科としての同窓会（さくら会）も、幹事役を引き受けてくれる几帳面で素敵な仲間のおかげでこれまで続いています。ともに山登りをした友人たちともお付き合いしています。苦しいときもずっと変わらずに受け入れてくれたかけがえのない仲間たちに支えられ、私は生きてきました。2003年に東洋大学に着任しました。

◆大学紹介と新型コロナウイルス感染症への取組み

東洋大学は、1887（明治20）年に哲学者井上円了によって創立された「哲学館」を前身とし、「諸学の基礎は哲学にあり」を教育理念として継承してきた総合大学であり、現在5つのキャンパスに13学部15研究科を有し、学生数も3万を超えます。歴史を振り返りますと、1916（大正5）年に、当時は男子だけの専門学校群の中で初めて女性の入学を認めました。山形県出身の栗山津禰（ツネ）さんで、彼女は優秀な成績で卒業し、現小石川中等教育学校に初の女性漢文教諭として採用され、当時の新聞にも掲載されています。

広く知られているように、東洋大学は私立総合大学として初の女性学長を生み出しています。お茶の水女子大学出身の神田道子先生です。先生が学長をなさっていたこともあり、東洋大学では私が学長となるさいにも女性だから、ということでのネガティブな反響はまったくありませんでした。時代は明らかに変化していると思います。

新型コロナウイルス感染症対策では、4月の学長就任とともに学部長全員と法人側の理事や事務局部局長全員をメンバーとする対策委員会を設置し、学長が委員長となって教職協働の対策を講じています。対策委員会をほぼ毎週開催することで迅速な対応をとることができていると思いますし、3万人以上の学生への修学支援金の給付（15億円以上）や対面授業の同時配信によるハイブリッド授業を提供しております。今後は、高い教育効果をもたらすことで学生に豊かな学びを提供することができるよう、本学の教育力の高度化をめざしてまいります。

◆室伏きみ子学長へ

室伏学長はアフターコロナにおけるお茶の水女子大学の「新しい学びと研究のスタイル」そして、今後のさらなる発展について、どのように展望しておられますか。今回、複数の学長が誕生していることから、お茶大には女性たちを逞しくそしてしなやかに自立させる文化があるのではないかと私は密かに考えておりますが、先生はこのことについてはどのように受け止めておられますか。また先輩学長としてご助言いただきたいのですが、「学長としての冷静な判断」のためにどのようなことに留意されていますか。ご教示いただけますと嬉しく存じます。どうぞこれからもご指導のほど、よろしくお願いいたします。

東京外国語大学学長

林佳世子さん（昭56史）

私は、文教育学部史学科を1981年に卒業しました。大学時代は、東洋史には和田先生、佐藤先生、西洋史には中村先生、平野先生、山本先生、日本史には青木先生、大口先生、五味先生が在職され、すべての先生の授業を受けました。こうして先生方の名前を思い出すと、いかに東洋史、西洋史、日本史をバランスよく学ぶチャンスをいただけたかと思います。私は東洋史志願でしたが、1年次での日本史の史料講読の授業のことは、今でも忘れられません。日本語なので、他の分野より早くから史料を直接扱うことができたのだと思います。古文書の裏にある社会の仕組みを垣間見せていただける授業で、感動しました。私自身はまだアラビア文字をぼちぼち覚えている段階でしたが、いつか現地の史料を使った研究をしたいと夢が広がりました。そうした世界に誘っていただけた史学科、そしてお茶の水女子大学に今でも感謝をしています。

その後、オスマン帝国の歴史を研究し、その関係で東京外国語大学に職を得、トルコの歴史や言語を20数年にわたって教えてきました。2019年4月からは、同大学で学長の職についています。

◆大学紹介と新型コロナウイルス感染症への取組み

私が勤める東京外国語大学は、世界の言語、文化、社会を教育・研究する大学として、日本の大学群のなかでは特別な役割を担っています。全世界の200以上の大学と実質的な交流があり、学問の世界で、日本と世界を結んでいる大学だと自負していますが、今は、パンデミックの真っただなか。リアルな学術交流や留学の道が閉ざされていることが、一番の悩みです。しかしそのぶん、オンライン教育の道が開かれたことは光明です。世界の大学へ、やむをえずリモート留学をする学生も多数おりますが、今後は世界諸地域の大学とのオンライン共同教育へ舵を切っていかねばならないと思います。

同じことは、国内にもいえます。東京の国立大学同士、お茶の水女子大学と東京外国語大学のあいだには、単位互換協定が存在しています。しかし、これまでの行き来はごくごく限られたものでした。しかし教育のオンライン化が定着するなか、大学間の交流には新しい道が開けています。それぞれの得意な分野の教育を相互提供することにより、大学ごとの特色はさらに際立っていきます。それはおそらく日本の大学の新しいかたちにつながっていくことでしょう。アフターコロナの時代に向け、二つの大学の間で先駆的な取組みができればと願っています。

◆室伏きみ子学長へ

室伏先生とは、2年間にわたり国立大学協会のさまざまな場でご一緒させていただきました。室伏先生の、穏やかな、しかし事態をまっすぐに見据えてご発言なさる姿にいつも感服しておりました。その存在感は、女性学長・男性学長という枠を超えたものだと思います。とはいうものの全国86の国立大学の学長に女性が3人しかいない、という状況は惨憺たるものです。会議の場はダークスーツ一色です。いつの日か、大学長のジェンダーバランスが人口比に見合う比率になる日まで室伏先生にはしっかり見守っていただきたいと思います。どうかお元気で、ますますのご活躍をお祈りいたします。

同志社大学学長

植木朝子さん（平2国）

私は1990年文教育学部国文学科を卒業しました。日本の中世文学に興味をもっています。なかでも、旋律に載せて歌われた歌謡に関心があります。近代になって作られた「文学史」においては、突出した才能をもつ個人の作品が高く評価される傾向にありますが、集団によって支えられた文芸の世界も実に豊かな広がりをもっています。中世の歌謡集として、平安時代末の『梁塵秘抄』、室町時代の『閑吟集』などがありますが、これらには貴族や僧侶の手になると思われる優美で教養豊かな歌のほか、文字を書くことのできなかった相対的に低い階層の人々の喜怒哀楽を伝える歌も多数収録されており、現代の私たちの心にも強く訴えかけるものがあります。学長として、今年度重点的に取り組む課題の第一にダイバーシティの推進を挙げていますが、あらためて、私が心惹かれた歌謡の面白さのなかで、多様性が大きな一角を占めていることに気づかされます（研究対象を選ぶときに「多様性」を強く意識していたわけではありませんが、潜在的にはあったのではないかと、今ごろになって思います。こじつけの感も否めませんが……）。2005年に同志社大学に着任し、2020年4月から学長に就任しました。

◆大学紹介と新型コロナウイルス感染症への取組み

同志社は1875年に同志社英学校として誕生して以来、創立者新島襄が『同志社大学設立の旨意』で宣言しているとおり、自治自立の精神に富み、自由を尊び、良心を手腕に運用する志高き人物の育成をめざして、教育研究活動を展開してきました。三つ葉のクローバーとして親しまれている徽章が示すように、知・徳・体の三位一体、全人格的教育を掲げる大学なのです。本学にはまた、「人一人ハ大切ナリ」という新島の精神が脈々と受け継がれています。人を個人として大事にするというこの考え方は、多様性を認め、尊重しようという本学の伝統、文化の根底をなすものです。コロナ禍により、春学期は全面的にネット配信授業を実施しましたが、秋学期からはネット配信と対面の2形態で授業を実施しています。感染拡大予防と教育研究活動を両立するために、「同志社大学版新型コロナウイルス感染症拡大予防のためのガイドライン」を定めて対応しているところです。看板やポスターによる注意喚起（マスク着用・手洗いの徹底・行動記録作成の呼びかけなど）、マスク自販機の設置、一部施設での検温実施、パーティションの設置、間隔をあけた座席利用指導などが、対策の一例です。

◆室伏きみ子学長へ

ダイバーシティ推進の流れのなかで、女子大学に対する風当たりが強くなっていますが、完全なジェンダー平等が実現されていない現在の社会において、私は女子大の存在意義は大きいと思います。共学の大学に勤めていると、女子学生が男子学生に遠慮する様子をしばしば目にします。私の所属する文学部国文学科は、女子学生のほうが多いにもかかわらず、たとえばゼミ長を決めるとき、男子学生がいれば、ほぼ自動的に男子学生に決まります。それが「当然」という雰囲気なのです。女子大では、「当然」、女子学生がリーダーになります。また、女に学問などいらないという考え方が、実は一部には根強く残っているなかで、私は、そのような考え方に煩わされることなく、当然のように進学しました。女子大を出てから、厳然たる差別の存在に驚くことは多々ありましたが、学生時代、私はのびのびと勉強することができ、本当に幸せでした。大学に守られていたと思います。（完全なジェンダー平等の実現をめざしつつ、実現しないうちは）女子学生たちに、そのような幸せな場を与えつづけてください。

室伏きみ子さん（昭45生）

◇室伏きみ子学長より矢口悦子先生へ

伝統ある総合大学で、本学の卒業生でいらっしゃる神田道子先生、矢口悦子先生が学長としてご活躍くださることは、創立当初から女性リーダーの育成をミッションとして掲げてきた本学の同窓生として、とても誇らしく思っております。本学では、コロナ禍を契機に、グローバル社会に対応した質の高い教育システムを構築し、学生たちに提供してまいります。アフターコロナの時代において、人々が再び元気を取り戻し、平和で健康な生活を構築していくためには、ますます多様な考え方と実践力が求められ、とくに女性の力が必要になると感じております。ご指摘のように、本学の卒業生たちは、大学での自由な学びを通して、しなやかな感性と自主独立の精神を身に着け、社会の多様な場で逞しく活躍してくれています。「学長としての冷静な判断」ができているかどうかはわかりませんが、何かを決定する際には、お茶の水で学ぶ人たちの幸せを基準とし、「だれかが幸せになることならやろう」と決めています。

◇室伏きみ子学長より林佳世子先生へ

東京外国語大学とお茶の水女子大学との間で、教育のオンライン化を通じた大学間交流を推進することは、両大学の教育資産の融合によって新しい教育のかたちを生み出すことにもなります。グローバル化が進む世界で活躍する人材を育てるために、両大学の連携の強化を、ぜひ実現させたいと思います。国立大学協会では、大変お世話様になりました。林先生が私の後を引き継いでくださり、いつも笑顔で会議を進行してくださることに、安らぎを覚えております。今後ますます、国立大学にとって厳しい時代になりそうですが、先生の包容力で、乗り切ってくださいますよう、お願いいたします。おっしゃるように、86の国立大学で女性学長がわずか3名という状況は、なんとか改善すべきと思います。旧帝大のかたがたに、「思い切って総長を女性になされば、大きく変わりますよ」と申しあげているのですが、なかなか同意してくださるかたはいらっしゃらないですね。現在の総長のみなさまの意識改革も必要かもしれません。

◇室伏きみ子学長より植木朝子先生へ

本学と同じ年に創立され、「良心教育」を掲げて教育・研究・社会貢献に取り組んでこられた歴史ある同志社大学で、お若い植木先生が初の女性学長に就任されましたことは、同窓生として、とても誇らしく思っております。女子大学の存在意義はこれまで何度となく議論され、国立大学の法人化の際には、本学と奈良女子大学が他の共学大学に統合される可能性もありました。でも、女子大学には、先生も経験されたように、自分自身を成長させることのできる自由な環境があります。私たちは、これからの社会を創る女性たちが、大学という学びの場で、画一的な固定観念から解放されて、自由に自身の資質・能力を開発し、自らの価値を認識して、社会に貢献しようとする精神を育むことが重要であると考えており、現状でそれができるのは、女子大学であると思っています。自ら責任をもって活動の中心に身をおき、どんなことにも挑戦できる女子大学での経験は、学生たちの自立心を高め、学業を終えて変化の激しい社会に出て行った際にも、柔軟な思考力と適切な判断力のもとで、力強い歩みを進めることができると信じています。

◆おわりに◆

それぞれ特色のある大学で学長を務めていらっしゃる3人のかたがたとの意見交換は、とても楽しく、また意義あるものとなりました。そして、本学が素晴らしい卒業生を生み出してきたことに、大きな喜びを感じています。現代社会が抱える諸問題は、ますます複雑で多様なものになってきています。大規模自然災害の襲来や、新型コロナウイルスの感染拡大など、これまでに経験したことのない問題に直面して、私たちがもっている従来の知識と考え方だけでは、もはや対応できなくなりました。それらの問題の解決をめざし、さらにその先の社会を創っていくためには、多様な智の結集が不可欠です。本学から巣立った学長たちのリーダーシップのもとで、それぞれの大学の特色ある教育と研究に基づいた情報を交換し、互いに協力することで、課題解決に向けた新たな解が見つかるのではないかと思います。

お茶の水女子大学は、人生100年時代に向けて、多様な価値と人々が交錯する社会で生き、人々の幸せと世界の平和に貢献できる人材を輩出しつづける大学でありたいと願っておりますので、みなさまとの連携・協力を強化させていただけますと幸いです。

学生のアクティビティ

What's PBTS?

-Project Based Team Study-

科学・技術が進んで複雑化している中で、新たなイノベーションを作り出すため、
高度な専門知識に加え、特定の分野に閉じない幅広い視野と
コミュニケーションを通して課題解決できる力を持った人材が求められています。
お茶の水女子大学では、大学院にグローバル理工学副専攻を設け、
そうした力を養成するカリキュラムを開設しています。
今回はグローバル理工学副専攻の中核でもある、
PBTS：Project Based Team Study についてご紹介します。

グローバル理工学副専攻について

本副専攻プログラムは、平成 25 年度に文部科学省による「博士課程教育リーディングプログラム」に採択されたことに伴い設置されました。その目的は、日本社会の将来に関わる最重要課題である「女性の社会参画」の要請に応えるため、中でも、物理・数学・情報の基盤力を身につけた理工系女性の活躍を一層推進するべく、グローバルリーダーを養成することにあります。

プログラムは、①異分野基礎教育の基盤力強化コースワーク、② Project Based Team Study(PBTS) によるチーム力強化コースワーク、③グローバル研修でのグローバル力強化コースワークを 3 本の柱とする学位プログラムとプログラム達成度を評価するシステムで構成され、基礎力とともに俯瞰力・課題解決力、国際性を有する学生の育成を実践しています。博士課程教育プログラムのため、博士前期課程 2 年と後期課程 3 年間を合わせた 5 年一貫制となっています。

なお、文部科学省プログラムとしては令和元年度で終了しましたが、本学独自の教育プログラムとして引き続き事業を継続しています。

PBTS について

企業内で行われているプロジェクト研究をモデルとする、異なる分野の学生数名がチームで取り組むプロジェクトワークです。学生が、課題設定からその運営のマネジメントまで主体性を持って推進します。ワークは原則として英語で実施されます。

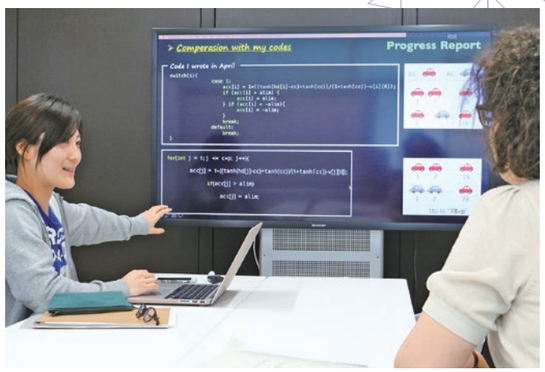
活動内容としては、毎週 1 回チームメンバーと自ら選定するスタディコモンズの教員などでミーティングを行います。あわせて、チーム毎に指導教員団を指定して、学内外からサポートを受けることができます。また、企業や他大学との共同研究の実施も可能です。

2020 年度からは、履修資格を全専攻に拡げ、文系・理系の学生が同じチームスタディを行うことを目指しています。

今回は、副専攻プログラム 4 期生で、Traffic Jam チームに所属する金城 佳世さん（理学専攻・物理科学領域博士後期課程2年）にお話を伺いました。

半期毎に行うpQE(PeriodicQE)

金城さんへのインタビュー



学部生の頃の所属を教えてください。

学部時代は東京理科大学理工学部に在籍しており、素粒子論研究室の所属でした。物性物理と素粒子物理との対応に興味があったため、卒業研究では、場の理論と数値計算を用いて反強磁性体中の渦糸解の性質について調べていました。修士進学を考えたときに数理物理学に興味を持っていることを当時の指導教員に伝えたところ、出口先生（理学専攻・物理科学コース）の研究室を勧められ、お茶大への進学を決めました。

PBTSでは「Traffic Jam」を研究テーマにしているとのことですが、簡単に説明をお願いします。

手動運転と自動運転が混在した交通状態で発生する渋滞の解消法を明らかにするためのシミュレーションモデルの開発を目指しています。

具体的には、自動運転車、手動運転者がそれぞれどのように走行するかのモデルを用意して、1 レーンのサーキットで自動・手動運転が混在した状況のシミュレーションを行っています。現在はマルチレーンで車線変更を行うようなシミュレーションモデルの開発も行っています。

PBTS での活動について教えてください。

チームの発足時は、数学コースの学生、生活工学共同専攻の学生、そして物理学コースの私の 3 人で活動していました。その頃は、数学の学生がモデルを作り、物理の私がシミュレーションをして、生活工学の学生が解析をする、というように分担していました。現在は 1 人で活動しているので、1 人でモデル及びシミュレーションの作成を行っています。また、渋滞学や計算錯覚学を専門とする武蔵野大学友枝明保准教授の協力も得て、議論したり、アドバイスをもらったりしながら研究を進めています。

週に 1 回、スタディコモンズの外国人教員 2 人に対して、英語で進捗を説明します。その 2 人の先生の専門は物理でも数学でもありませんが、自分とはまったく違う視点から指摘をもらえるので、気づきを得ることが出来ます。

自分は修了まであと 1 年なので、これから他のメンバーを募って活動することは難しいのですが、例えば、自動運転車が走っている状況で、手動運転の車を運転する人間の心理がどのように変化し、影響をもたらすのかについて、社会心理学を専門とする人と一緒に研究ができたら面白そうだなと感じています。

週1回行うスタディコモンズ教員とのミーティング

修了後の展望を教えてください。

研究成果が社会実装に結びついたらいいなとは思いますが、今は「なんでそうなるんだろう?」という自分の興味を追求しています。

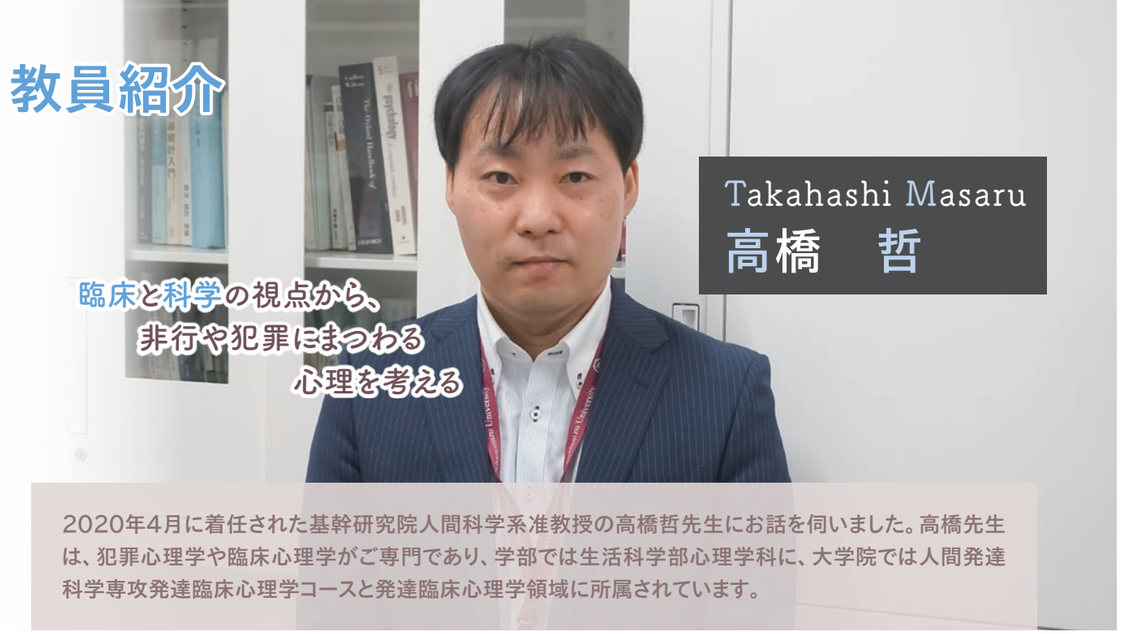
研究者も視野に入れていますが、プログラミングのスキルや教員免許も持っているので、スキルを活かして就職することもいいなと思っています。

最後に一言お願いします。

主専攻の研究に加えて PBTS に取り組むことは、単純に研究量が 2 倍になりますし、大変ではありますが、一研究者として研究テーマも研究の進め方も自主的に考えて作っていく経験は主専攻では得がたいものだったと思いますし、自身の成長につながったと思います。

文系の学生も参加することができるので、興味がある方はチャレンジしてみてください!

教員紹介



Takahashi Masaru 高橋　哲

臨床と科学の視点から、非行や犯罪にまつわる心理を考える

2020年4月に着任された基幹研究院人間科学系准教授の高橋哲先生にお話を伺いました。高橋先生は、犯罪心理学や臨床心理学がご専門であり、学部では生活科学部心理学科に、大学院では人間発達科学専攻発達臨床心理学コースと発達臨床心理学領域に所属されています。

Q1 ご経歴について教えてください。

私は東京大学教育学部を卒業した後、法務省に入省し、約20年にわたり心理技官として勤務してきました。法務省在勤中には、南イリノイ大学カーボンデール校に留学して修士号を取得し、帰国後は社会人学生として筑波大学大学院人間総合科学研究科で博士号を取得しました。2020年3月に法務省を退職し、同年4月にお茶の水女子大学に着任しました。

Q2 心理技官とはどのようなお仕事ですか。

心理技官は、矯正施設において非行や犯罪の原因を分析する心理職です。特に、私が勤務していた少年鑑別所における心理アセスメントは、面接や心理検査等を通じて、非行少年の行動の背景にあるさまざまな要因を明らかにし、立ち直りに向けた方策を考えるものです。日々の業務の中で彼ら彼女らの態度や境遇に感情が揺さぶられることもありますが、「なぜ非行をしたのだろう」と面接や心理検査や行動観察を通して客観的に仮説を検討し、その子らしい像が浮かび上がってくると、「ああそういうことか」と腑に落ちて、立ち直りに向けた方策を具体的に提案できます。非行や犯罪というと、眉をしかめたり、“向こう側”と“こちら側”の二つに分けて捉えたりする方もいるかもしれませんが、そう簡単ではないなあと痛感させられることが多かったです。

Q3 これまでにどのような研究をなさってきましたか。

専門は犯罪心理学や臨床心理学という分野です。臨床現場で不思議に感じたことや、非行少年を理解するために必要だと思うことを実務の傍らで研究してきました。大学教員には本来一貫した研究テーマがあるべきなのかもしれませんが、私は、犯罪者や非行少年の再犯防止や改善更生に役立つものであれば何でも研究したいと考えています。

その中でも、特に研究してきたことの一つが、再犯リスクアセスメントです。非行少年が再犯するかどうかを追跡研究で確認し、再犯する者と再犯しない者とに分けたうえで、生存時間分析などの統計学的手法を用いて実際に再犯と関連する要因を一つずつ明らかにしていきます。単に「ある人が再犯しそうかどうか」を予測してその当否に一喜一憂するのではなく、個々人の再犯リスクを見極めて、そのリスクが高い人に重点的に支援を行うといったように、あくまで改善更生に生かすための手法を開発するために実務の中で行ってきた研究です。

もう一つは、嗜癖的な行動、特に自傷行為について研究してきました。他者の権益を侵害する者というイメージのある非行少年や犯罪者は、実は自傷行為に及ぶ比率も高いのです。自傷行為は、自己の感情を調整することや自己を罰するために行われることが多く、特に女性においてその傾向が顕著であることもわかってきています。自傷と他害はコインの裏表と言われることもありますが、双方がどのように関連するかについてさらに研究したいと考えています。

Q4 これから取り組まれたい研究・教育について教えてください。

社会において犯罪やその対策が話題に上る際に、先入観や信念をもとに議論がなされ、科学的根拠が疎かにされていると感じることがあります。臨床心理学の中でも司法・犯罪領域は特に科学的根拠を重視しますが、それらを一般市民にどのように伝えて理解してもらうかについては、まだ研究の余地があると感じており、認知・社会系の心理学者との共同研究にも興味があります。その一方で、面接や心理検査における職人芸も臨床現場では重要であり、職人芸と科学の双方の観点から研究していきたいと考えています。

研究以外にも、本学の心理臨床相談センターの運営と相談員である大学院生の育成も私の責務であり、心理職としての研鑽を積みながら、教育に取り組みたいと考えています。

Q5 お茶大生に対してどのような印象をお持ちですか。

もの静かでありながら芯が強い、というイメージです。法務省にも多くのお茶大OGがいらっしゃいましたが、優秀であるだけでなく、組織の中で自分の意見を通すための強さや柔軟性も兼ね備えており、見習う点が多いなあと感じていました。

Q6 お茶大生に向けたメッセージをお願いします。

希望する進路や研究テーマが明確な方もいれば、まだ迷っている方もいると思います。最初は興味がなかったことでも続けているうちに面白い点が見えてきたり、ひょんなことから道が開けてきたりするように、偶然に思えることが人の進路を変えていくことも多いように感じます。食わず嫌いせずにいろいろな場に顔を出してみることが大切なのかもしれません。

文責：人間発達教育科学研究所　助教
今泉 修

卒業生紹介

©Takayuki Abe

Karatsu Eri 唐津 絵理

所属：愛知県芸術劇場
（公益財団法人愛知県文化振興事業団）
出身：熊本県

1990年3月	お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒業
1992年3月	お茶の水女子大学人文科学研究科修士課程修了
1992年4月	愛知芸術文化センター（文化情報センター）に就職
1993年4月	同　全国初の公務員ダンス学芸員となる
2010年～2016年	「あいちトリエンナーレ」パフォーミング・アーツ部門キュレーター
2014年4月	愛知県芸術劇場シニアプロデューサー（現在に至る）
2020年3月	Dance Base Yokohama アーティスティックディレクター（現在に至る）

前例のない公務員ダンス学芸員に就いた経緯

1980年代後半、数多くの海外のダンスカンパニーが来日公演を果たします。この時期に唐津さんは本学の舞踊教育学科（当時）で学び自ら踊ると同時に、舞台公演を数多く鑑賞したと言います。海外のダンスについてさらに学びたいという思いで大学院に進学し、ある時、所属カンパニーと音楽家との共同作品がニューヨークでのフェスティバルに招かれ、現地の舞踊文化に直接触れることになりました。そこでの出会いによって、自らはダンサーとしてではなく別の形でダンス芸術に携わることを考え始めます。帰国後、新たに開設される愛知県文化情報センターでのダンス専門の学芸員求人の相談が指導教員片岡康子教授（当時）の元に入ります。唐津さんはこの求人を受け、翌年通信教育で博物館学学芸員資格を取得し、全国で初と言われる公務員ダンス学芸員となりました。

事業計画はデザイン型思考で！

現在唐津さんは、愛知県芸術劇場にて国内外のバレエ団やダンスカンパニーの公演を企画するだけでなく、自ら振付家やアーティストらをつなぎ多様な組織や劇場と連携して新たなダンスの公演のプロデュースも手掛けています。前例の無い事業を実現し、さらに成功させる鍵は何かを伺いました。「当初はダンスについて知る人はほとんどいなかったので、上司にダンスの事業の必要性とその効果などを説明し納得して」いただき、地域の観客を集めるために「ダンスの価値を伝え、これまでと違うどんな新しい体験ができるか等のイメージを提供する」そしてこれらのための「リサーチを常に欠かさない」とのことでした。ニーズを探し解決策を考えヴィジョンを提供するという、まさにデザイン型の思考です。

ダンス作品の観方をどう伝えるか？

愛知県芸術劇場は舞台芸術を鑑賞する場を提供する事業に加えて、普及教育、地域課題解決型の事業を展開しています。唐津さんはこれらの事業を複数展開されていますが、とりわけ筆者が感銘を受けたのは、潜在的観客層への普及教育事業でした。というのも唐津さんが力を注ぐコンテンポラリーダンスは、市民参加型のワークショップとしては国内の公共ホールでも注目されていますが、その公演への観客動員は難しいとされています。そこで唐津さんに、一般の人々にダンス作品の観方をどう伝えるのかと伺いました。すると「誰もが体を一つだけ持っていますよね。ダンスを観るというのは、その体が生み出すクリエイティビティや可能性を感じること」。また「人類の歴史の中でダンスは常に人の生死に関わり、鼓舞してきた。難しいことを考えなくてもダンサーの動く身体を生で、観ればミラーニューロンの働きで元気になれる」ということを教えて頂きました。これはダンサーの動きを観て感じるだけでも、自分がダンスをするのと同じ効果をもてることを意味しており、芸術作品を当事者として体験する素晴らしさを伝える言葉であるように思います。

©Naoshi HATORI　提供：Dance Base Yokohama
「ダンスのアクセシビリティを考えるラボ～視覚障害者と味わうダンス観賞篇」研究会の様子

一方で、唐津さんのような公務員ダンス学芸員という立場が今なお「全国で唯一の」と言われるのは喜ばしいこととは言えません。唐津さんにその理由を尋ねたところ「ダンス専門の学芸員が国内の劇場で必要とされていない訳ではないけれども、そうした環境の中で周囲の理解を得ることは難しく、さらに女性というだけで差別的な対応を受けたり、補助的な仕事として扱われることもあり、そこに激務であることも加わり、やめてしまう人が多い」とのことでした。近年、本学の卒業生にも出てきているダンス専門の学芸員やキュレーターの人にむけては「容易にあきらめないこと。工夫してダンスの魅力を伝える努力をすること、そして同じような志をもつ人たちとの連携が大切」と伝えたいと語られました。

©Naoshi HATORI　提供：Dance Base Yokohama
OpenLab「ダンサー、言葉で踊る」トークイベントの様子（写真左から小尻健太、島地保武、唐津）

DaBY（デイビー）始動へ

そもそもダンス芸術は自活が難しく、慢性的な収入不足にある領域だと言われます。唐津さんはこうした領域にこそ支援が必要と声をあげ、2020年春、セガサミー文化芸術財団の支援を受け、パフォーミング・アーツの拠点Dance Base Yokohama（愛称DaBYデイビー）の開設を実現されました。DaBYは横浜みなとみらい線馬車道駅直結のビル3Fのフロアを占めるスペースで、スタジオ、資料閲覧アーカイブコーナー、そして照明機材などの什器のあるアクティングエリアがあります。自主企画事業、活動拠点支援事業、活動支援事業と幅広く、コロナ禍でせっかくのオープニングイベントが延期や変更を迫られながらも、ライブ配信や動画配信も組み込みながら精力的に活動が展開されています。

唐津さんは、DaBYをダンスアーティストのプロフェッショナルな活動を育み支援する場として、またダンスに限らず領域を超えたアーティストや関係者の交流の場となることを目指していると言います。DaBYに熱心に通う学生も出てきています。「ダンス芸術をとりまくわが国の環境を、今いる人材や、機関の連携によって改善していきたい」と語られる姿に、取材を通して感銘を受けました。

取材・文責：基幹研究院人文科学系助教
福本まあや

わたしのオフタイム

お休みの日は、昨年14歳で亡くなったボルゾイ犬を思い浮かべながら、4歳になる黒猫と過ごしています。そんな時には必ず美味しいスイーツも用意します。時間があれば、ひたすら寝たりマッサージをしたりして、リラックスするようにしています。

附属学校園からのお知らせ
～いずみナーサリー便り～

お茶の水女子大学附属いずみナーサリー（以下ナーサリー）は、
当月で6ヶ月になる0歳児から年度内に3歳になる2歳児までの小さな子どもたちのための学内保育施設です。
保護者は、学業や仕事と子育てとを両立させようと日々奮闘する学生や教職員です。
キャンパスの片隅の、小さなおうちのようなナーサリーで、
どの子もその子らしくのびのびと、そして仲間と共に過ごす毎日を、少しご紹介しましょう。

みんなの遊び場

ナーサリーの玄関は、キャンパス南門から100m足らずのところにあります。建物南側には道路を挟んで新大塚公園が見え、北側は附属幼稚園の園庭の一部である「おやま」と接し、四季折々の木々の色付きを眺めることができます。

「おやま」はナーサリーの子どもたちにとっても大好きな遊び場で、見上げるような築山登りに挑戦したり、木のぬくもりを感じるすべり台を楽しんだり、秋にはシートを敷いてお昼を食べたりと格好の外遊び空間です。

午前中にたっぷりと遊んで、しっかりとお昼を食べて、ぐっすりお昼寝をして、3時には3大アレルゲンフリーのおやつを食べてエネルギー補給。お迎えまでの時間を過ごします。

ナーサリーの様子

2020年度の春は、大学閉鎖に伴いナーサリーも5月末まで閉室しました。子どもたちの居ないナーサリーはひっそりとしていましたが、周りの植物や木々は緑を保ってしっかり育ち、季節を全身で受け止め反映していました。
プランターに植えておいた野菜たちも立派に育って再開後の子どもたちを迎え、子どもたちは実が大きくなって色づくことを楽しみにして、収穫したあとには試食。食べ慣れない野菜でも、目の前で調理をして友だちと一緒に食べると格別なごちそうになります。

誰かと一緒に楽しむこと、友だちと同じ体験をすること、友だちと同じ気持ちを持つこと、友だちと気持ちがすれ違うこと…様々な体験を重ねながらの日々です。

仲間と共に笑い合い、時にぶつかったり泣いたり立ち止まったりしながらの子どもたちの生活が、子どもたち自身によって、四季を通じて織りなされています。おとなたちにとっては大変に思うことが多い毎日でも子どもたちにとってはワクワクが詰まった日々の積み重ねであってほしいと思います。

ナーサリーのこれから

ナーサリーの前身である「いずみ保育所」は2002年に誕生しました。すべてのいのちの源の意を込めて、元学長の本田和子先生（児童学）が「いずみ」の名を付けられたそうです。
みずみずしい生命の循環を支える「いずみ」。とても小さなナーサリーですが、入所条件を満たす希望者の全員受け入れを守りつつ、子どもたちや保護者だけでなく、隣り合うようなかかわり方でつながってくださる多くの方たちにとっても、風通しのよい、あたたかくやわらかな陽の差し込む「いずみ」のような存在でありたいと思っています。

附属学校園での出来事（2021年1月～3月）

【いずみナーサリー】

1月
- 避難訓練（地震・屋内待機、主任不在想定）
- お正月あそび
- 災害用伝言ダイヤル試行

2月
- 避難訓練（抜き打ち、火事、屋外避難）

3月
- 個人面談
- 避難訓練（抜き打ち、地震、室内待機または屋外避難）
- 親子であそぼう会 代替企画

【附属幼稚園】

1月
- 始業式
- 教育実習事前指導（3年生）
- 避難訓練

2月
- 豆まき
- 誕生会(1・2・3月合同)

3月
- ひなまつり
- 5歳児　お楽しみ会
- PTA総会（紙面開催）
- 卒業式
- 3歳児・4歳児終業式

【附属小学校】

1月
- 始業式
- 高等学校とのオンライン交流授業（5年）

2月
- 公開研究会(オンライン)

3月
- 情報モラル講習会
- 卒業式
- 修了式

【附属中学校】

1月
- 授業開始
- 特別時間割週間（1年）

2月
- 自主研究発表会（2年）
- 期末テスト（全学年）
- 保護者会（3年）

3月
- 卒業式
- 修了式
- 保護者会（1、2年）

【附属高校】

1月
- 始業式
- 大学入学共通テスト（3年）
- 学力テスト（1、2年）
- 保護者会（1、2年）（オンデマンド配信）
- 筑波大附属との合同キャリアカフェ（オンライン）

2月
- 入学検定・合格発表

3月
- 卒業式
- 修了式

お茶の水女子大学学報　第266号
▽発行日:2021年2月22日
▽発　行:国立大学法人お茶の水女子大学
東京都文京区大塚2-1-1（〒112-8610）

ご意見・ご感想はこちらまで
企画戦略課広報企画担当
電話 ：03-5978-5105
FAX ：03-5978-5545
E-mail：info@cc.ocha.ac.jp
URL ：https://www.ocha.ac.jp/

本誌、お茶の水女子大学学報「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。

Copyright (C) 2021 Ochanomizu University. All Rights Reserved